

会 議 名	令和８年度第１回吹田市障がい者差別解消支援専門部会
日 時	令和８年７月９日（木） 午後２時から午後４時まで
場 所	メイシアター３階 レセプションホール
出 席 者	【委員】福西委員、金澤委員、小暮委員、近藤委員、坂本委員、道添委員、上野委員、古谷委員、高木委員、生駒委員、植野委員、稲垣委員、横山委員、宇都宮委員、山本委員、北村委員、百武委員、加賀城委員、西岡委員、春貴委員、田原委員（名簿順） 【事務局】障がい福祉室 吉村室長、平井参事、川島主幹、田浦主査、以倉主任、坂田係員
会 議 要 旨	
※「次第」参照。 １．開会 ２．挨拶（吹田市障がい福祉室長より） ３．委員の変更について 「令和８年度 吹田市障がい者差別解消支援専門部会 委員名簿」参照 ４．令和７年度第１回 障がい者差別解消支援専門部会の振り返り 「（資料１）令和７年度第１回 障がい者差別解消支援専門部会の振り返り」を参照 ５．令和７年度第２回 吹田市地域自立支援協議会全体会議の報告 「（資料２）令和７年度第２回 吹田市地域自立支援協議会全体会議の報告」を参照 ６．（仮称）障がい福祉推進計画について 「（資料３）（仮称）障がい福祉推進計画について」を参照 ７．令和８年度の障がい者差別解消支援専門部会の取組についてのご提案 ～「当たり前」を見直すプロジェクト～ 「（資料４）「当たり前」を見直すプロジェクト～日常の気づきから共生社会を考える」を参照 ８．グループワーク 「第１弾テーマ：みんなで懇親会を開く」についてグループワークを実施。 以下各グループの発表内容。	

グループ1

・障がい者の店選びは、「食べたいもの」を選ぶのではなく、「車いすが入れるところ」「広いところ」等を選ばなければならない。

・店員さんとのやりとりがパターン化されているお店はやりやすい。急な質問があると困ってしまう。コンビニ等パターンが決まっているとできるが、いつもと違う質問や対応を求められると動けなくなってしまう。

・合理的配慮については、お店にとっては「義務」に感じられているように見え、当事者にとっては「お願い」ベースであり、ここの差があるのではないかと、という話になった。合理的配慮の理解がまだまだ広まっていない。

・利用者が「車いすの方が1名です」と言うのではなく、お店から「配慮が必要な方はおられますか」と聞いてくれるような社会になれば良いな、と思う。

グループ2

・車いすだと「行きたいところ」ではなく「行けるところ」を探すことになる。

・最近導入するお店が増えているタッチパネルは、視力障がい者にとっては便利になったとは感じられず、同行者に操作をお願いすることになってしまう。

・障がい者としては「一緒に行くと迷惑をかけるのではないかと」考えてしまう。

・人間同士なので、「行ける方法」を、コミュニケーションを取りながら探していくことはできると思う。言わずに遠慮するのではなく、まずコミュニケーションを取っていくことが大事。

・中途障がいの方の話を聞き、自分もいつ病気や障がいになるか分からない、と思いながら生活することも大事だと思った。

グループ3

・目に見えない障がいの人もいるので、「とりあえず行って飲めば何とかなる」ではなく、事前準備をしていくことが必要。

・車いすが入れる場所かどうか、狭いところが苦手な人がいないか、支払い関係は対応できるか（例えばQRコード払いは視覚障がいの人に対応できるのか）等、今まで気にしていなかったことについて目を向けてみると、そういう人たちはどのようにしていたのだろう、と考えるようになった。

・いきなり飲み会、ではなく、それぞれの家庭で取り組んでいることを共有したり、一緒にやってみる、というのも良いと思う。カレー研究会に入っている、という方の話から、カレーならみんな取り組みやすいね、という話になった。

・お互い何の支援が必要かな、ということを経験してから、一緒に食べる場を作った方が楽しめるのかな、という意見が出た。

・いろいろハードルはあったとしても、時間をかけていろんな方に理解を深めることでスムーズに対

応できるところもあり、職場でも取り組めるところがある、と思った。

グループ 4

- ・耳が聞こえない当事者にとっては、「会話に入れない」状況となってしまうため、飲み会は欠席することが多い
- ・お店は注文するときに口で言うとうまく注文できず、注文内容がズれてしまうことがあった。最近ではタッチパネル等が導入されたので、注文しやすくなった。
- ・周りに障がいのことを理解してくれる人が増えてきたので参加しやすくなってきたと感じている。
- ・「お店を変える」ことは難しいが、障がい者仲間で昼食等に毎週同じお店に行くようにしていたら、最初は冷たかった対応が向こうから「これどう？」と伝えてくれるようになった。
- ・障がい者自身も動いていくことが必要だと思う。
- ・歯科でも同じようなことが起こっており、障がい者だからと我慢している人もいる。

グループ 5

- ・大学生の時、サークルやゼミでの飲み会が多かった。車いすユーザーは多目的トイレやベッドが必要だが、大学生が行くような飲み放題があるお店にはそういった設備がない。
- ・最初にピッチャーでビール等が届くが、トイレに行けないことを気にして水等を飲むようにしており、気を使っていた。食事もとれず、家に帰ってからご飯を食べていたこともあった。
- ・当事者ではなくても、飲み会という場に気を使ってしまう、「行きたい」という気持ちがなくなってしまいう人もいた。
- ・常時呼吸器を使用しているので「食べながらしゃべる」ができないが、発達障がいを持つ方でも「しゃべりながら食べる」ができない、と言っている人もいる。
- ・みんなが楽しめる懇親会を開く、というのはなかなか難しい。
- ・どんな条件の人がいるのか、を確認しながら、飲み会、食事会の話を進めることが必要。
- ・どのように進めているかをみんなで共有することが大事。
- ・「楽しく」「自由に」懇親会ができるよう、それぞれの条件を話し合い、時間をかけて進めていくことが必要。

9. 総評・感想

春貴会長：実際にやったことがある、という話を聞き、「そうなんだ。できるんだ」と希望を持つことができた。みんなの話し合いの中でも、準備ができれば可能、という話も聞こえてきており、前向きに話し合っていたのではないかと、思う。障がい者が動いていくことで社会が変わっていくんだということを実践されている当事者のお話もあったと思う。行きたいところではなく、行けると探さないといけない、という社会のルールや学び、気づきもあった。この部会で話したことがここだけで終わることはもったいない。実際に懇親会

をやってみたり、話し合ったこと、得た気づきについて発信していけるようにすることをこの部会の一つの事業としてやっていってはどうか、と考えている。ハンドブックや冊子を作って、「合理的配慮」という堅苦しい制度のことだけではなく、障がいがあってもなくても地域の中で暮らしていく中でどんな課題があるのか、必要な配慮を体験して学んだことを可視化して発信していけるようにしていきたい。

事務局：「食事をする」という当たり前のことをもう一度考えてみる、ということは生活に紐づいており、人との繋がりも必要となるテーマであり、とても良いと思った。発表の中で出てきた「お店の方から「車いすの人はおられますか」と質問してほしい」という内容は確かに必要なことだと思う。アレルギーや好みは聞いてもらえるのに、配慮は先に聞いてもらえていない、と気づいた。部会で話し合うことによって、小さなことであっても積み重ねていき、何か成果として実現できるよう、市としてもサポートしていきたいと考えている。

配 布 資 料

(参考資料)「令和8年度 吹田市障がい者差別解消支援専門部会 委員名簿」

(資料1)「令和7年度 第1回 吹田市障がい者差別解消支援専門部会～ふりかえり～」

(資料2)「令和7年度 第2回 吹田市地域自立支援協議会全体会議～ご報告～」

(資料3)「(仮称) 障がい福祉推進計画 2027-2032 (案)」

(資料4)「「当たり前」を見直すプロジェクト～日常の気づきから共生社会を考える」

グループ 1

- ・車いすでも入れるのか、知的障がい者で文字が読めない人はメニューの写真から決められるか、そういうサービスがお店にあるのか。
- ・合理的配慮の考え方をお店はどれくらい理解してくれているのだろうか。
- ・以前「注文は？」と聞かれた時にこたえることができず、店員さんに嫌な顔をされたことがある。
- ・コンビニやスーパー等で受け答えが決まったことはできるが、デパート等かしこまった場所ではうまくやり取りできず「お願いします」と答えてしまうことがある。
- ・店の方から説明してくれたり、「どうしますか」と聞いてくれたりするとうれしいが、嫌な顔をされたりすると苦痛を感じてしまう。
- ・お店の予約の時に「車いす利用者が一人います」と伝えるが、本来はお店の方から「配慮が必要な人はいらっしゃいますか」「お店で用意しておくものはありますか」という質問が日常的に出るような社会になってほしい。「言わなかった方が悪い」というふうに思われるのは嫌だ。聞いてくれた上で、店側から説明があったら、お互いに歩み寄ることができる。
- ・「食べたいもの」を選ぶのではなく、「行けるところ」を先に選んでしまうと、行けるところにしか行けなくなってしまい、馴染みのあるところしか選べなくなってしまう。やっぱり新しいところや話題になったところも行ってみたい。世界を広くしたい。
- ・お腹が空いていても、このお店はどうかな、愛想はいいかな、悪いのかな、と思って不安を感じたり緊張したりしてしまう。
- ・慣れたコンビニやスーパーには一人で行くが、飲食店等には家族や友達と行くようにしている。
- ・店員のイメージで昼間の方が良いと感じる。昼間は明るい人が多いが、夜になると店員も暗くなるように感じる。
- ・もっと理解が進めば、障がい者が店に入って「邪魔だな」と言われる世界ではなくなってくる
- ・支援学校の修学旅行では、企画の段階でアレルギーやペースト食や刻み食を用意してもらうことが可能か考える。行けるところで選んでしまっているため、行きたいところで選びたい。
- ・いざ店に入ってみないと暗黙のルールがあるところがあるので入りづらくなっている。食べ放題だとお皿はそのまま使っていいのか、コップは変えてもいいのか、自分のこだわりもあり、難しく感じて気が引けてしまう。
- ・対面が苦手なので、セルフレジを使うことが多いが、こんなにビニール袋を使ってもいいのかと思ってしまうたり、遠くからお店の人に見られていると感じたりする。「ご自由にお取りください」はどれくらい、どうやって持って行っていいのか、不安になってしまう。
- ・障がい者でなくても、健常者でも、社会通念のような当たり前が分からないと感じることはある。
- ・食べ放題の「大量に残すと追加料金をもらいます」はどの程度なのか分からず、最後不安になって

頑張って食べてしまう。

- ・最近お店が決めるルールが強く感じてしまい、客の方が気遣っているようにも思う。

グループ 2

- ・このメンバーでお店を予約して、と言われると、何を気にしたら良いのかパッとは分からない。トイレや駐車場からの動線等はすぐに思いつくが。
- ・段差等も障壁になり、行けるお店はかなり限られるだろうと思う。
- ・ベビーカーを使い出した時、一気に行けるお店が少なくなったと感じた。夫婦だけだと行けていたお店に行けなくなり、大衆向けのチェーン店に行くことが増えた。「行きたいところよりも行けるとここに行く」という感じ。迷惑をかけるんじゃないか、と思って、雰囲気良すぎる場所はもう行けなくなってしまった。
- ・視覚障がいでも明るさを感じることができる人もいるが、暗めのレストラン等は行動しづらくなってしまう。
- ・コンビニはどこのお店も大体の構造が同じなので動くことができるが、慣れた場所であってもフードコートでは「空いている席を探すこと」が難しい。
- ・タッチパネルも同行者がいると一緒に入ろうといえるが、一人だと対応できない。
- ・親がいた時は何でも助けてくれていたが、子どもに対してはそうは言っていられないので、自分からアピールするようにしなければならない。
- ・明るければ少しは見えるので、ヘルパーを使わないように買い物している。だいたいどこに何が置いてあるのか分かっているし、いつも買うものしか買わない。分からない時は声に出して「現金のところ押してください。後は自分でします」と言うようにしている。
- ・理解してもらうには、障がい者自身からも思い切って外へ出ていかないと理解を得られないと思っている。嫌な思いをしたこともあるけれど、飛び込んでいかないと。
- ・昔は切符を買う時に初乗り運賃だけ買い、あとから精算機で支払う方法を取っていた。最近は IC カードが主流になり、スーパーや温泉等でも取り入れられているが、タッチパネル等も便利なイメージがあるがなかなか実際使っていくには難しい部分も多い。
- ・飲食店では、メニューは読み上げてもらったり、お皿の位置を教えてもらったりすると対応できるが、中華のようにグルグル回る机の場合は取り分けて配ってもらうしかなくなってしまった。
- ・懇親会をしたら、車いすユーザーの「段差がないところ」と視覚障がい者が読める「点字付きメニュー表」といった、いろいろな部分を考えていくことになるが、すべてが完全に整っているお店はなかなかないと思う。例えば、一段だけの段差であれば乗り越えるのを手伝ってもらったり、点字メニュー表がなかったら読み上げてもらったり、一緒にできるかもしれない、という方向が考えられる一方で、障がい者からすると相手に負担にならないか、と思ってしまう。
- ・お店にとっても、少しのサポートで来てくれる人が増えれば、利益にもつながると思うが、障がい者自身が足手まといになってしまわないか、と考えて引いてしまうと周りも動けなくなってしまった。障がい者本人に一步踏み出してもらうことも大事だと思うし、触れ合うことでお店の人にとっても合理的配慮の学びに気づくきっかけになると思う。
- ・お店の方から、最初からウェルカムの雰囲気を出してもらっていると、すごく心が楽になる。お店

が「車いす全然OK」というように表示してくれればありがたい。

- ・お互いの視点が分かれば、少しでも距離感が縮まる感じがする。
- ・どんなことで配慮しなければいけないか、一緒に時間を過ごすことで分かる部分が多いと思う。

グループ3

- ・どこかに食べに行くとしても、一人に対応することができないので、ヘルパーの同行が必要。
- ・場所の下見が必要だと思う。どれぐらいの人数が入れるか、車いすでも入れるか、トイレの設備、エレベーターの有無、会場での注文方法等、確認事項はたくさんある。
- ・「見えない障がい」パニック障がいでは一駅一駅しか乗れないとか、不特定多数のいる中ではそわそわして全然落ち着かないとか、会議の絶対に離れられないような拘束されるような感覚とかがある。
- ・双極性障がいだと気分が下がった時は死にたくなる絶望感があり、仕事では上司と一緒にコミュニケーションを取ってもらいながらやっている。
- ・店の種類によっても、「狭い」ところは過呼吸になってしまう。
- ・カニ道楽での懇親会にすれば話さずにすみ、楽しいかもしれない。
- ・食事を作りながら、自然と会話しながらやってみるのも良いと思う。
- ・それぞれ使いやすい決済方法が異なるので、お店でその決済ができるか確認が必要。
- ・一人で参加できない人もいる。実際に懇親会をやるとしたら、真夏よりかは涼しい時期が良い。
- ・障がいの症状は自分自身では理解できているが、周りには伝えていくしかない。症状を共有することで進めることができるところも多い。

グループ 4

- ・自分だけが聞こえない場では、人が盛り上がる場所が一番いやだと感じていた。みんなが楽しそうなのは分かっているけど、何を話しているのか全く分からない。何か話している途中で終わったりしていることもある。そのような場では筆談も難しい。今はスマホで周りの話を文字にしているのを見ていることが多い。
- ・人の会話を聞き取ることができないと楽しめず、何年も懇親会に参加していなかった。
- ・個人の食事会で困るのはお店の人との会話で、コミュニケーションに困る。
- ・懇親会をやるとしたら、「美味しいものがある」だけでは行きたくない、前もってできるサポートを提示してほしいし、最初を感じる雰囲気をよくしてほしい。入りやすい雰囲気こそが重要。
- ・普段の生活の中でも手話をしているとジロジロ見られるが、居心地が悪くなるのでやめてほしい。
- ・懇親会では、開催する立場の人が障がい者の目線を想像して対応していくことが求められる。
- ・周囲の人が障がいに対する理解を深めることで、全員が楽しめる懇親会になると思う。
- ・懇親会をするなら「配慮が必要な方はいらっしゃいますか」等の声掛けを行うことや、障がい者が参加しやすい雰囲気を作ることが必要。
- ・障がい者が独りぼっちにならないような配慮も必要。
- ・自身の障がいを隠して生活している人も一定数おられるが、そういった人たちも本当は懇親会や飲食店に行きたいと思っていても、配慮が少ないため、行きたい気持ちにならないのだろう、と思う。
- ・日常的に障がい者に対する配慮は必要である。

グループ 5

- ・障がいがなくとも、「しゃべりながら食べる」というのが苦手だと感じており、懇親会の実施を望みながらも尻込みしてしまう。
- ・障がいと言っても様々なので、その人のニーズを聞きながら選択していくことが必要。
- ・学生が行くような安い飲み放題があるといったお店は、障がいがある人は行きにくい構造になっていることが多い。
- ・呼吸器をつけていると、しゃべるか食べるか、どちらかしかできなくなってしまう。そのため、お店に行くのではなく、家に来てもらってゆっくりしゃべる、といった方法ばかりになっている。
- ・お酒が飲めない人からすると、「懇親会」自体が好きではない。付き合いで参加することはあるが、飲み放題だと損をしたように感じることもある。
- ・根本的なところだと、懇親会ってやらないといけないのかな、と思ってしまう。やりたい、という気持ちよりも、怖い、孤独を感じてしまうのではないかと考えてしまう。
- ・それぞれの経験から、障壁になっていること、感じ方等を分かち合うことができれば「懇親」になると思う。独りよがりで楽しむのは「懇親」ではない。
- ・行くか行かないかギリギリまで悩む、行きたいけど割が合わない・お金を払うだけと思ってしまい、等いろいろ考えてしまい、結局ドタキャンになってしまうことで誘ってもらえなくなってしまった。
- ・みんなで本当に楽しめるような形で開催するべきだが、楽しかったと言える体験が少ない。障がいがなくとも楽しかった体験が少ないので、障壁はとても多いと思う。
- ・最初はどううまくいかないかもしれない、でも一緒にどんなことに困ったか、どんな体験をしたか、という共有する意識が必要であり、出てきた課題を話し合う「反省会付き懇親会」でも良いと思う。
- ・みんなが等しく楽しめる会にしましょう、それぞれが意見を出し合いながら、そういう会をしようとしているんだ、というイメージがつけば、実施できるのかもしれない。